



モニタリングサイト1000

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター

2014年 秋期概要

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2014年秋期の結果概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2014年度秋期概要をお知らせします。

秋期の個体数は2010年以来最小に

2014年度秋期調査は、2014年8月1日から9月30日までの期間実施されました。111ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査(9月7日を基準日とした前後1週間の調査)への参加は100ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類 44種 14,093羽、クロツラヘラサギ 6羽が記録され、秋期の全サイトの最大個体数(調査期間内に記録された各種個体数の最大値)の合計では、シギ・チドリ類 53種 31,354羽、クロツラヘラサギ 24羽、ズグロカモメ 1羽が記録されました。



写真1. キアシシギ

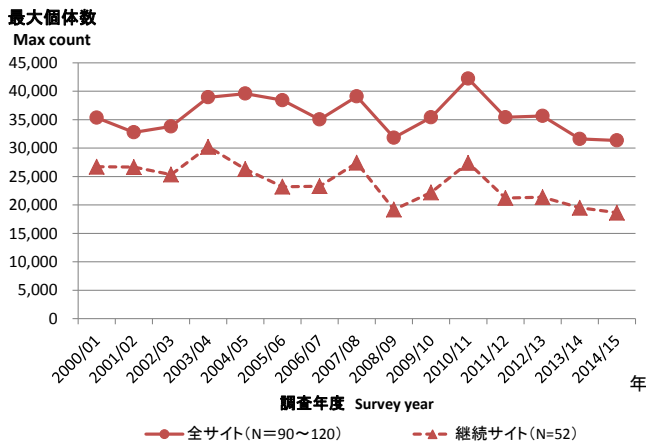


図1. 秋期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移 (2004年から2014年の継続サイトN=67)

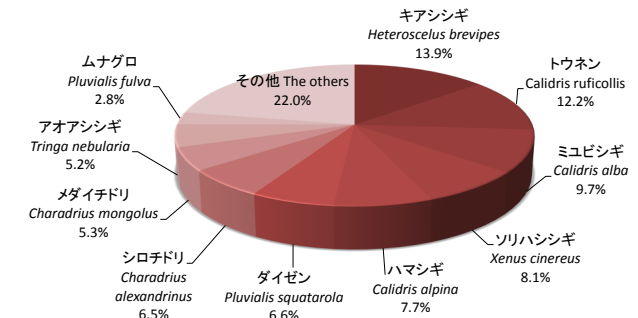


図2. 2014年秋期調査の優占種

2000年からの「全サイトの最大個体数の合計」と「連続して調査が継続されているサイトの最大個体数の合計」を、グラフに示しました(図1)。全サイトの最大個体数の合計は、前年度秋期と比べ約250羽減少(-0.8%)し、31,354羽となり、継続サイトでは、前年度秋期と比べ約900羽減少(-4.5%)して、18,634羽と両合計とも2000年以降で最小値となりました。全サイト合計では、2012年度秋期にわずかに前年度より増加したものの、2010年度秋期をピークに徐々に減少しており、継続サイトでも同様に減少傾向が続いています。第2期(2008/09-2012/13)のとりまとめでも分析した秋期の減少傾向が、継続している状態です。

最大個体数における優占種の上位5種は、キアシシギ(13.9%)、トウネン(12.2%)、ミユビシギ(9.7%)、ソリハシシギ(8.1%)、ハマシギ(7.7%)でした(図2)。上位10種では、シロチドリが5位から7位になった以外は、昨年と変化がありませんでしたが、シロチドリは2004年度秋期には、構成順位2位の個体数であったものが、相対的に減少し2011、2012、2014年度には7位となり、懸念される状況です(図3)。

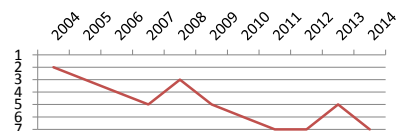


図3. シロチドリの構成順位の変化(秋期)

表1. 2014年秋期と2013年秋期の調査に参加した104サイトの各種の最大個体数合計の順位と前年度比。2013年秋期を“1.00”として増減率を表記。薄赤色は昨年よりも20%以上減少した種。2014年秋に50羽以上確認されている種を対象とした。

種名	個体数		前年度比	種名	個体数		前年度比	種名	個体数		前年度比
	2014年	2013年			2014年	2013年			2014年	2013年	
1 キアシシギ	4,263	3,809	1.12	12 コチドリ	698	655	1.07	23 アカアシシギ	174	184	0.95
2 トウネン	3,634	3,739	0.97	13 タシギ	516	408	1.26	24 オオソリハシシギ	168	199	0.84
3 ミユビシギ	2,826	3,352	0.84	14 タカブシギ	507	379	1.34	25 ホウロクシギ	162	190	0.85
4 ソリハシシギ	2,535	2,577	0.98	15 チュウシャクシギ	479	625	0.77	26 オグロシギ	146	128	1.14
5 ハマシギ	2,400	2,147	1.12	16 オバシギ	427	689	0.62	27 コアアシシギ	123	78	1.58
6 ダイゼン	2,069	2,021	1.02	17 イソシギ	419	443	0.95	28 エリマキシギ	109	31	3.52
7 シロチドリ	1,962	2,225	0.88	18 ケリ	397	332	1.20	29 オオメダイチドリ	101	189	0.53
8 アオアシシギ	1,604	1,438	1.12	19 セイタカシギ	328	284	1.15	30 キリアイ	100	29	3.45
9 メダイチドリ	1,590	1,852	0.86	20 ミヤコドリ	311	124	2.51	31 クサシギ	99	91	1.09
10 ムナグロ	819	1,057	0.77	21 ヒバリシギ	207	192	1.08	32 ダイシャクシギ	95	139	0.68
11 キョウジョシギ	740	546	1.36	22 アカエリヒレアシシギ	200	19	10.53	33 コオバシギ	50	45	1.11

ムナグロなどの減少傾向

種毎に昨年度秋期の個体数と比較した表を表1に示します。オオメダイチドリ(前年度比0.5倍)、オバシギ(同約0.6倍)、ダイシャクシギ(同約0.7倍)、チュウシャクシギ、ムナグロ(同約0.8倍)が前年度から2割以上減少している種となりました。



写真2. オオメダイチドリ

2004年から2014年までの秋期調査を継続している67サイトで、上記の5種の最大個体数の合計の推移を見ると2年連続して減少しているのは、ムナグロのみでしたが、ムナグロ、オバシギ、チュウシャクシギは11年間(2004~2014年)で最小値となっていました(図4)。また、同様に継続調査している67サイトでみ

最大個体数合計

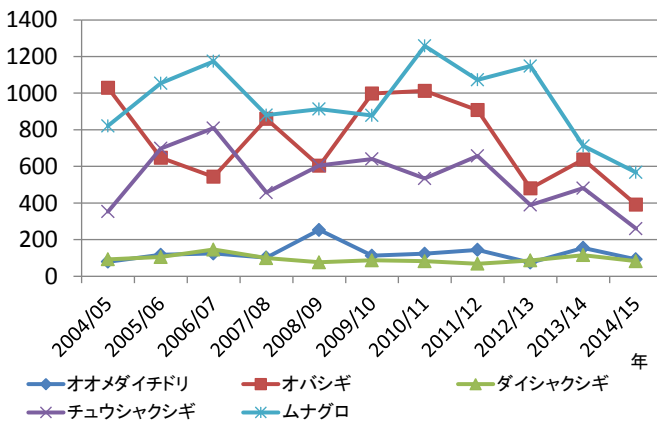


図4. オオメダイチドリ、オバシギ、ダイシャクシギ、チュウシャクシギ、ムナグロの最大個体数の推移 (2004年から2014年の継続サイトN=67)

ると、トウネン、メダイチドリ、コチドリ、キョウジョシギ、オオソリハシシギ(環境省RL II類)、イカルチドリも11年間で最小値を示していました。繁殖地、中継地、越冬地や生態が異なる種が最小値を記録しており、多くの種の渡りルートとなっている東アジアにおける河口域の埋め立てなど、水辺の生息環境の悪化が懸念されます。

逆に前年度比で増加が目立った種は、アカエリヒレアシシギ(前年度比約10.5倍)、エリマキシギ、キリアイ(各同約3.5倍)、ミヤコドリ(同約2.5倍)などでした。また、エリマキシギのほか、オオハシシギ、セイタカシギ、ミヤコドリは11年間(2004~2014年)で最も大きい値を示していました。

絶滅危惧種では、ヘラシギ(I A類)が、雲出川河口五主海岸(三重県)、吉野川下流域(徳島県)、大授揚(佐賀県)で各1羽が確認されています。秋期の観察記録が比較的多いヘラシギですが、観察数が増減を繰り返しながら徐々に減少しています(図5)。またカラフトアオアシシギ(I A類)が、山口湾(山口県)、不知火干潟(熊本県)で各1羽確認され、クロツラヘラサギ(I B類)が、16サイトで合計24羽確認されました。

最大個体数合計

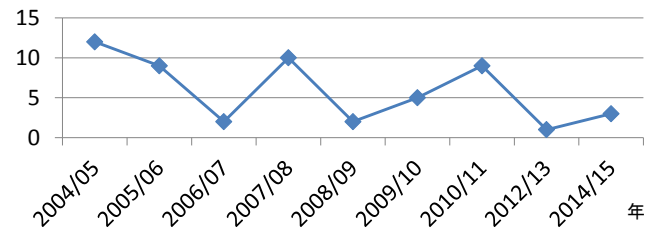


図5. ヘラシギの最大個体数の推移(秋期) (2004年から2014年の継続サイトN=67)

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:ハジロコチドリ(バードリサーチ) 2014年 秋期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史 電話/Fax:042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp